

## 翻刻『曾我根元評判大全』

卷之拾九

後藤多津子

## 凡例

本文は底本通りに翻刻することを主眼としたが、読解の便をはかつて次の処置を施した。

- 1 句読点に相当するところは一字あきとした。
- 2 仮名は現行の字体に統一した。
- 3 片仮名「ハ」「ミ」「ニ」は捨仮名の場合を除いて平仮名扱いとした。
- 4 仮名の清濁については、底本にない濁点を適宜補い、補った文字の右に・を付した。
- 5 漢字は通行字体を用いたが、慣用字は底本のままとした。
- 6 反復記号は底本のままとした。
- 7 明白な誤り及びわかりにくい宛て字は適宜改め、底本の文字を振り仮名の位置に残した。
- 8 底本に振り仮名がある場合は、その振り仮名にへを付して7と区別した。
- 9 脱字は「」内に補った。
- 10 損傷等により判読不能の部分は、字数のわかる場合には字数分の□で、字数のわからない場合には□で示した。

## 翻刻

曾我根元評判大全 卷之拾九

## 本章

右大将頼朝公 日本惣追捕使に被補任しより以来 次第に国法衰へ 武家追日権勢強く 京都に両六波羅を置 両人の探題西国迄の政事を司り 武威天下に輝き 武家草創の君にして 日本平静なり 然申に 頼朝思召は 当時 俊乗坊重源上人 大仏造営以来隠居して殊勝の僧なりと聞召 急ぎ鎌倉に召れしが、頓然不応 二位殿は罪業深き人なり 我先年大仏供養之時見之に刃傷の相あり 対面す

まじと宣　頼朝心底に歎き給へども　玉　四海今平静なり　如何に左様

之事可有哉

斯て 建久九年七月 稲毛三郎重成妻死去す

是は政子御台の妹君也 歎き重くして 菩提の為 相模川の橋供養

有 頼朝為結縁御參 至還御 八的松原にて 馬上にて行過給ふに

俄に目くらめき　立所に落馬あり　頓病発　諸寺諸山の御禱禱に依

て一度平癒也 此時 事の御   に相語りし終へり これより不

思議あり 畠山重忠の音声大きに替り 佐藤継信 又は鈴木重家

伊勢義盛が・声の如し 折々替り 諸人不審に思へり 惣じて此畠山

は年来政子誉め給へり玉 頼朝奴忿にして 畠山に恥を与へんとあたに

や 不形に見ゆる如く直衣の袖ちぎつて 猿楽の事あり しかも

形ちいさぎよく　今の麻上下也　忍おそばるゝとの風説有　重忠の当番

も当りて 頼朝薄衣被<sup>かつ</sup>き 政子に・変じて伺ひ給<sup>玉</sup>ふ 重忠見之 妖怪

也と刺し殺て本座に帰り 人曾て不知之 天命の報ふ所也 併此

節せつ 政子思慮深く 御内外様に知る人曾てあらざるなり 頼家相続

して 天下静謐に治り 日本海内治り 吹く風も鎌倉様と思はるゝ

日□始り  
か□□□  
軀に非ず。

抑 頼朝公十六歳之時 伊豆国蛭が小嶋に流され 廿一年の星霜歳

を経て終に天下を握る 草創国君の第正なり 果報斗とも非□良将

也 賴朝公之時初而 日本惣追補使に補せられ 武威盛んにして

王信次第衰へたり  
是偏に白河の法皇<sup>王</sup>の御感の余り  
望み申ばとて

かくは有まじき也 □□衰へたり 惣じて 頼朝石橋山の戦□□

木曾□□□□追討の事は継哉 軍資□□□□く 頼朝之代に当て 京

都六波羅に奉行 諸司代を据へ 各州の探題を立 日本国中□□頼

朝の下知なり 鎌倉の繁昌申に不及 抑 此鎌倉は地形堅固にして

繁栄の地 陸の手配能く 海□の通路 四方の国郡に便宜よく 誠

に移□の地也　また鎌倉号し事は　大職冠官鎌足公常陸国に出生の人

也 都に上り宮中に奉仕 家門栄へ 天智天皇八年に藤原氏を賜<sup>たま</sup>はり 入鹿の大臣を討て内大臣に補せられ □□□□故に満ち<sup>み</sup>く<sup>て</sup>

鹿嶋参詣の戻りに 相州由井の里に宿して 其夜の靈夢に依て 守

の鎌を大蔵の松が岡に埋み給<sup>たま</sup>へり 此時より鎌倉と号しけり 鎌足

公□玄孫 染谷<sup>や</sup>太郎此地に住居して 代々鎌倉<sup>くら</sup>の領主として関八州

の棟梁たり 其後 八幡太郎義家此地を開き 鶴ヶ岡の八幡宮を造<sup>そう</sup>

営して 本国として源氏の惣領として 頼朝公此地に□□して 大

倉の谷松が岡に館□給<sup>たま</sup>へり 治承三年 頼朝此地に移り給<sup>たま</sup>ひ 誠に

盛なる鎌倉 □

頼朝公 俊乗坊を被召 下知に不応事

頼朝公越方を思ひ廻し給<sup>たま</sup>ふに 扱も 石橋山之合戦より以来一生

涯の内 木曾□□を始 人を殺す事□幾<sup>いく</sup>万人 其上 罪有も罪無<sup>な</sup>き

も我一人の為に死せり 此報ひ為結縁 当時日本無双の殊勝の僧重  
源上人に謁して 後生の事も聞たく思召れて招るゝ 時に 往昔の

智識は実にや貴かりき 上人の返答には 頼朝は現世大悪の人也

対面に不及 抑 国家の為□思へども 我身の為に仇敵多して 平

家扱は源氏の一門兄弟悉く 此人のために亡 天晴罪業深<sup>ふか</sup>き人也

其上 今我を呼るゝは全く本心に非ず 世間の人心を探<sup>さぐ</sup>り求む我□

んの□あり はるく鎌倉に下るべきや 菩提を願ひ給<sup>たま</sup>はゞ三略有

天下は子孫に譲り 法鉢禪衣の身となり 罪を懺悔して永く□来を

祈るの心ならば 又天下の為に可成と思ふ心のなかるらん 其上

に 頼朝は前方見<sup>みな</sup>し事有 一生涯の内 悪相<sup>あくさう</sup>有て 定て刀にて命を

落さるべきとの返答也 頼朝□御台の政子□有まじき事 今天下平

静なり 如何に斯様之事可有哉 □浅間敷色に覚給<sup>たま</sup>ふ 智識の眼力

がごと 此事合たり 頼朝罪業<sup>おと</sup>を思ひ せめての事に 奥州□馬□

□の鎧兜 并鞍置三疋□□ 金銀山のごとく布施物に送らるゝ 往

昔の人は殊勝にて 甲冑は悉くほどき □□物として仏殿の破損に

使はるゝ 鞍一口は衆寮の具として 金銀馬鞍共に 不残□□入用

に無之物とて返されけり 外物 謂なき施物 堅く不可請との返事

なり 頼朝公 珍殊勝の僧□□思はれけり

# 頼朝公八的原にて病発之事

建久九年 稲毛三郎重成の妻死去せり 是北条□妹 政子の妹也

政子御台深く歎き給ひ 為大菩提相模川の橋を掛けらるゝ 凡 橋

の事は 万民川を渡るに苦しみを助く 是に過たる事有まじとて橋

普請あり 既に成就 大供養結縁の為 頼朝公参供養修行し給へり

事済て還御在に 御供人花びやかなるに 跡先□□□夥しく 何様

平静の代也 草木もなびく勢ひなり 頼朝公馬上にて浜辺に出て

げにや 斯様の治国も□物か 我伊豆の国にありし時はかゝる風情

はなかりしと思ひ給ひて 稲村ヶ崎八的原を過給ふ時 □浦辺の□

の方に赤旗翻翻して 平家の一門□に見ゆ あら不思議やと 暫く

馬を控給ふ 時に 向ふの方より 馬より下りて来る者有 小桜緘

の鎧着て 白旗の□□□握り 髪を四方に捌き 三人の若武者あり

頼朝□□になり □□□して夢の如くに覺えて見給へば 佐藤継信

忠信 鈴木重家三人 頼朝の馬を□□と留めて 三人御迎に参たり

されども 罪なき主君義経公を世になし人となし給ふ 我々むなし

く忠死を仕る この報ひ 是非に冥途へ同道可申と言 頼朝夢中に

成て 馬廻駈ぬけんとし給ふ時 越中次郎兵衛盛副大石をいたゞき

声を立て 頼朝に打□□と 夢見る如くに有て 頼朝即時に絶死し

落馬し給ふ 供奉之面々大きに驚き さまぐに療治申けり 御輿

に移して 鎌倉に入り 漸人心地付くより 諸寺諸山に御祈祷 此

度の病は快氣ありし 真之様子は病中に政子へ物語ありけり

### 畠山重忠不思議之事

世の中に不思議千万の事有 畠山秩父の重忠物言音律 佐藤四郎

兵衛忠信の声色に毛頭不違 □付て見れば 身振廻折々の所業 扱

も能々似たり 衆不審とは思へども 又□□重忠に替る事もなし

此故に 左迄の不思議にも不思議 何様 障子一重越に聞時は誠に忠

信が口上 折々は義経の御噂を申出して落涙致さるゝ 誠に忠信は

義経公の寵臣 吉野落中の最期にも 只頼朝への憎のみ 此一念に

もやありなんと 心有人は思ひ合へり

爰に雑説有 畠山重忠は 内々にて頼朝の疑ひ給ふ事有 抑 此

重忠は男衾と名を取て 和国第一の器量也 美勇也 此故に 奥向

女中□□に男の評判 重忠を誉立て 当時畠山殿ほどの美男のたく

ましき武士はあらじと口々に誉立てる 政子御前の妹君は重忠の妻女

□□故に鼻肩もあり □き□よ□りき 抑 奥向の女中方むざと畠

山殿を可見に非ずといへども 女中の僻として 当来も相同事也

去程に 天下一流□□に 諸大名 田楽の者ばら□□度く有 政子

女中方にも見物 簾中より見之 中にも畠山重忠は日本無双之美男

大力量の人にして 然も順和柔和愛想有人にして 諸人誉之 頼朝

見給ひて 重忠斗大紋の袖をとり 見苦しからんようにと畠山に賜

はりたり 是を着し □と拍子の太鼓を打るゝに 重忠拝領 即時

に彼の太紋の袖披き□ 肩にゑり□□□つゝ 折下立て着用せら

れたり 適見事成哉 前の直衣には百倍も増たり 鎌倉中の諸大名

見之て いやく 今迄の大紋は袖ふらくと不□ 畠山姿よ

しと 諸人大紋の袖ちぎりて 袖なしにして着之 今の世の長上下

也 それより武家の装束として □の麻上下は皆太紋の袖なし也

此以後は 奥向の噂にも 重忠は才智まで 大きに勝るゝとの評判

譽る□□□ 是等偏に天魔の所業也 明れば正治元年に□□□□

衆人の言出□るは 実によ 畠山殿は御台政子に忍て恋慕の心あり

と 雑説を言廻る 天命の尽る所也 重忠曾て知り給はず 頼朝聞

給ひ 大きに怒り給へども 慥成事を見給はず 只其沙汰奥向の評

判にて 実説はなかりけり □□の草創の君 天下を知り給ふほど

の大量の心入也 其上に聡明なる大将 無下に異成事は有間敷也

日本にても本鑑 伊豆日記 古今の実録 其上に武家の法令□□立ら

るゝ良将也 最期の躰 人も知ざりけるほどの事故 病死と申触た

るが 曾て左様非ず 旧記を探り 穩便之事とはいへども 頼朝公

にも大魔の見入にや 是又 平家の死霊のなす所か 不思議の心こ

そ出来たれ 畠山は随一の寵臣也 無躰に罪にもおとされず 然と

いへども 又 政子と密通こそ不心得事よと思ひ給へり 此雑説出

たる所は 元来北条時政より出たる子細は 当時 北条殿は御台政

子の父也 又 頼朝公の出世は根元時政に有 此故に 北条殿□諸

人尊敬するといへども 時政に相並て威勢を相諍人は 畠山重忠と

和田の義盛なり 此故に 北条内々にて重忠を亡すの謀略にて 闇

を用ひ 口説を言触るゝものなり

#### 右大将頼朝公最期之事

正治元年正月十日 畠山重忠 殿中勤番の当日也 □□頼朝公の

代々之評定衆 歴々の諸大名衆 耄人づつ泊番を相勤 其外近習大

番の十組泊番する 今晚は重忠殿当也 頼朝公 偏に乱心天魔の所

業にや また報ひの来るにや 天命の尽る時節にや 重忠の番を知

て 究竟の事□□ 兼て政子と密通と聞 能ためし也と 深更に及

んで丑三つの時分 奥の廊下に□□ 政子御前の衣一重丸く被

り 女の衣類と下にも見ゆる如くにして 細殿の廊下に只壺人<sup>玉</sup>給

へり 天晴天道の罪<sup>つみ</sup>とや 居<sup>い</sup>る人夜更ては無しと立出て 重忠 畠

山殿と 小声に二声三声呼給<sup>玉</sup>ふ 畠山は耳<sup>みみ</sup>早<sup>はや</sup>き人にして あら不思議

議や 此廊下は頼朝公の御寢所に続く所也 其上に 此所宿直<sup>とのみ</sup>の番

は畠山 本田 三浦 小山 結城 土肥 土屋 岡崎之面々十番に

替り 斯<sup>か</sup>様の時の為なり 先<sup>□</sup>鼠<sup>ねず</sup>走<sup>はし</sup>通ふ事不可成 又 奥よ

りは女中より外<sup>ほか</sup>なし 何様痴<sup>し</sup>れ者<sup>もの</sup>也 其上 畠山よ 重忠よと言

不心得事よと 畠山ははつと起て帯締<sup>し</sup>め直し 重代の秩父甲平を横

たへて 手燭おつ取差覗給<sup>玉</sup>ふに 如案 細殿の廊下に女壺人<sup>玉</sup>たり

頼朝は畠山が<sup>・</sup>出たるを見<sup>□□□</sup>ぞと思ひ <sup>□□</sup>すかしと走り来り

重忠に寄添<sup>よ</sup>んとし給<sup>玉</sup>ふ 畠山屹と見て 扱<sup>さ</sup>こそ妖怪のもの也 此所

に外の人<sup>く</sup>来る所に非<sup>ず</sup>と差寄て 何者ぞ 重忠を誑<sup>たぶら</sup>かさんもの天下

に有まじきぞやと 彼畠山甲平の太刀を振かざして 差寄たるを引

捕<sup>とら</sup>へて 心元を一太刀ぐつと差寄り あつと<sup>□□</sup>に最期也 何か重<sup>格</sup>

代の甲平を鏑元迄繰<sup>く</sup>り込んで扱<sup>あ</sup>りたり この後<sup>あと</sup>にて燭<sup>たて</sup>を立て 薄衣

を取て見れば頼朝なり 畠山大きに驚き こはそも如何成事<sup>□</sup> 可

有事共思はれず 然といへども 是非<sup>ぜひ</sup>に不及 誰知る人もあらず

其節の時宜によるべしと 薄衣そつと打着せて さあらぬ躰にて元

の所に出て 廊下口の錠前おろし 其敵は伏て 翌朝は三浦義澄に

番替り 帰宿<sup>玉</sup>し給<sup>玉</sup>ふ 今見<sup>□□</sup> 畠山殿には佐藤忠信が音律うつり

たるは 魂魄の入替りたると思はる 畠山殿は静たり人にて 穩便

人 曾て不言<sup>げ</sup>にや 頼朝公余り心底<sup>道</sup>覬<sup>ぞ</sup>欲<sup>ほ</sup>ゆへに 因果不慮の最

期 偏に天命也 時に正治元年正月十日也 披露は正月十三日也

五拾三才也 頼朝公伊豆の小嶋より起り 三拾四才にて旗<sup>あ</sup>を挙げ

天下を吞却して將軍になり 惣追捕使に成り 二十年の星霜<sup>歳</sup>を過て

良將なり 誠に可惜之事也 不慮之最期 残念の至なり 以後に

尼將軍とて天下に権勢高かりしも断也 政子御台は頼朝公寢所に見

得給は「ざ」るに依て 密に尋見奉給ひて大きにあきれて 女中に

もかつて知せず 身近き女中四五人を召つれて そつと掻き入て

廊下の血を隠し 先沙汰なしにして 父時政を密に呼て内談して

頼朝公御病氣と言立て 俄に諸寺諸山に御祈念 天下の諸大名 殿

中に群参して 先如此に始め置 十三日に逝去と披露有けり

畠山次郎重忠 智謀勝れ落付たる勇士ゆへに 此儀曾て色にも出

さず 是常の人の可及事に非ず 心の静なりたる人ゆへ 諸大名も

同列し給ふ かくて 正月十三日逝去之段披露有に 嫡子頼家公御

家督に給へば 別条無之 然ども 御台政子御前器量大ひに勝れ

聡明の人故に内権を取給ふ 北条四郎時政は父上也 又 頼家公の

祖父也 此故に 権勢強く表方へ申渡し 時政 諸役人を召具し申

渡さるゝ躰 奢り法に過たり 目に余るといへども 畠山重忠は心

底に一物有之故に 万端何のこはみもなく 諸事差控らるゝ 畠山

殿座上なれば 重忠をのけては唯壺人も是非を可論人も無之故に

北条殿に自然と威光は付にけり かくて 正月十八日 頼朝公之葬

送有 法華堂の西之方□上に葬り 印塔を立る 当代の御霊屋□□

に同じ その当日に 嫡子左中将頼家公家督を継ぎ 將軍に居り給

ふ 外祖父北条遠江守時政是を補佐し 始て執権職を請取 大に権

勢高く 天下風波なく静謐也 是より 北条は執権相統 誠に目出

度北条也 嫡子義時 孫泰時並んで繁昌なり

曾我根元評判 大尾

付記 資料の閲覧に際して御高配を賜りました宮崎県立図書館に、

厚く御礼申し上げます。